

## 論文審査の結果の要旨

### Predictive factors for improvement of ascites after transjugular intrahepatic portosystemic shunt in patients with refractory ascites

難治性腹水患者に対する経頸静脈的肝内門脈大循環短絡術の  
有効性に寄与する因子についての検討

日本医科大学大学院医学研究科 消化器内科学

研究生 滝 保彦

Hepatology Research Vol.44, Issue 8 (2014) 掲載

難治性腹水は肝硬変腹水の 5-10%にみられ、その予後は不良である。経頸静脈的肝内門脈大循環短絡術 (TIPS) は、難治性腹水の改善に有効とする報告があり、その有効率は 50-90%と報告されている。しかしどのような症例に有効なのかはいまだ明らかではない。そこで申請者らは、難治性腹水を合併した肝硬変患者 47 例を対象とし、TIPS 後 4 週および 8 週の治療効果に寄与する因子、および TIPS による難治性腹水の改善が生命予後に影響を及ぼすかについて検討した。難治性腹水に対する効果は 4 週で 36 例(77%)に認められ、11 例(23%)は無効であった。8 週の時点では計 37 例 (79%) で難治性腹水は改善した。4 週の有効に寄与する因子は単変量解析では年齢が若いこと、腎機能が良好であることであり、多変量解析では血清クレアチニン値であった。全例の生存率は 1 年 76%、2 年 54%、3 年 45%であった。4 週時有効例は 4 週時無効例と比べて有意に生存率が良好であった。クレアチニン値が 1.9 mg/dL 以下の症例は 1.9 mg/dL 以上の症例よりも有意に生存率が良好であった。

本研究は、難治性腹水に対する先進医療である TIPS の有効性に寄与する因子に関する数少ない報告の一つであり、腹水の改善が生命予後に影響を及ぼすことを明らかにした学術的に極めて意義深い研究である。したがって、今後の難治性腹水に対する TIPS の治療方針に影響を与える極めて価値のあるものと考えられた。二次審査では、使用したステントの種類、ドプラ超音波検査における門脈血流速度と TIPS 適応決定、門脈血栓症合併症例の有効性、術後肝性脳症の頻度、術後心不全の有無、肝硬変の成因の違いによる有効性、8 週で治療効果の表れる患者の特徴、TIPS を施行しない症例における腹水の治療効果に寄与する因子、術後の腎機能の変化などに関する質疑があり、いずれの質問に対しても的確な応答がなされた。

今回の検討は TIPS という高度先端医療技術を駆使してデザインされたものであり、今後の難治性腹水に対する TIPS の治療方針に影響を与える学術的に極めて意義深い論文といえ、よって学位論文として十分価値あるものと認定した。